

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

FEBRUARY
2019

2

半島の春は、音楽の春

春音と、SBTと、ぞうれつしゃと





半島の春は、音楽の春

～春音と、SBTと、ぞうれっしゃと

間もなく開幕する「知多半島春の国際音楽祭2019」。

約一か月半にわたって知多半島が音楽に包まれる恒例のイベントだ。

今回は多彩な公演の中から武豊町で上演される注目の二公演をピックアップし、その舞台裏に迫ってみる。



武豊は「春音」の発祥地

今年、平成二十五年（二〇一三）から一年おきに開催されている「春音」こと「知多半島春の国際音楽祭」の開催イヤーだ。半島全域で練り広げられるこの一大音楽イベントも今回で四回目。開幕を目前に控え、出演者もスタッフも練習や準備に余念がないことだろう。

今やすっかり定着した感のある春音だが、このイベントがどうやって始まったのか、知らない読者も多いと思う。まずはその歩みを紐解いておきたい。

実は春音には、前身となる音楽イベントがあった。それは、武豊町民会館ゆめたるうプラザ（以下ゆめプラ）のオープン直後の平成十七年（二〇〇五）から一年おきに、平成二十三年（二〇一一）まで武豊町で開催されてきた企画である。「武豊春の国際音楽祭」「武豊ビエンナーレ」などと名称を変えて四回行われたその催しは、国内外の一流音楽家を招いたいくつもの公演を、短期集中で開催したものの。県内屈指の設備を整えたゆめプラを存分に活用し、町民も積極的に参加して文化を創造して、こうという武豊町の施策を具現化した企画だった。

とはいえ、行政だけがこのイベントの運営に携わったわけではない。開催に先立って組織された実行委員会には、多くの町民も参加していた。





SBTの定期コンサートの歴代パンフレット

カモン・レッツ・スウィング!

そんな春音でぜひ来場してほしい、武

豊町では、ゆめプラ開館以前から町民有志が企画した音楽イベントが中央公民館や総合体育館などで盛んに開催されていた。また、ゆめプラも計画段階から町民参加のワークショップを開催して活用方法が熱心に討議されており、施設や企画に対する町民の関心は高かった。ゆめプラは「舞台芸術を核にした町民主体のまちづくり」の起爆剤であり、その第一歩がこのイベントだったのである。

小さな自治体にとっては画期的といえる施設とイベントは、次第に近隣市町で評判になっていく。そこで平成二十五年(二〇一三)、知多半島の全市町を巻き込み、十倍規模にバイジョンアップした「知多半島春の音楽祭2013」として開催された。住民参加型という武豊方式も広まり、各市町で組織された実行委員会のメンバーは地域住民が主体になっているところが多く、回を重ねるにつれ運営に携わる人々のスキルは上がっているという。参加グループ間の繋がりも強まり、中には地域おこし活動と連動する動きも出てきたというから、春音は知多半島の活性化に確実に寄与していると言えるだろう。

そんな春音でぜひ来場してほしい、武豊町ならではの公演を二つ紹介しよう。ひとつは、二月二十四日にゆめプラで行われる Swing Band TAKEOYO (以下SBT)の定期コンサートである。SBTは「町民バンド」として平成十九年(二〇〇七)十月に結成され、昨年に十周年を迎えた気鋭のジャズバンドだ。毎年春と秋に開く定期コンサートは今回で二十三回目になり、それ以外にも町内の様々な催しで演奏を披露しているので、目にする機会も多い。ジャズと言ってもいろいろあるが、SBTのジャンルはスウィング・ジャズ。これは大人気で編成されたバンド(いわゆるビッグバンド)による演奏形態のことで、大勢の演奏者によつて生まれる迫力あるアンサンブルと、思わず身体が動きだすグルーヴィーな楽曲が多いことが特徴だ。十五年ほど前にヒットした映画「スウィングガールズ」と同じバンド形態、と言えば分かっていただけるのではないかな。

現在のメンバーは総勢二十二名。最年少は中学生、最高齢は六十歳代と幅広く、男女比はおおよそ半々。毎週木曜日の夜七時から練習をしている。それぞれ仕事や学業、家庭があるので、きつかりに全員が集まって練習開始とはなかなかいかないが、そこは町民バンドなので厳しい縛りはない。少ない人数からゆつたりしたペースで練習が始まり、徐々に人が集まって八時少し前に大編成になる

のがいつもの流れだ。晩秋のある晩、ゆめたるうプラザ・響きホールでの練習日に訪ねてみた。その日はプロミュージシャンの鈴木学さんの指導日ということで、割と早い時間からメンバーが集まっている。指導者がいるとなれば少しピリピリしているだろうか……と思いきや、なんと和やかなムードだ。指導する鈴木さんも始終柔和な表情を浮かべ、指示や講評に時々笑える一言を入れてくる。

そのコメントは、音楽素人の取材班にとっては少し驚くような内容だった。「人に合わせよう合わせようとする」と全体が薄くなっちゃうよ。それぞれがソロのつもりで演奏して!」「まだ地味だなあ。ジャズなんだからもっと派手に! 暴れん坊に! 武豊のマダムたちを釘付けにしなきゃ!」「がんがんミスして構わないよ。オイシイ間違いつてもあるんだ」等々。アンサンブルなのにソロのつもり? 間違ってもOK?

SBTのバンドマスター、樫原明子さんはこう話す。「楽譜の上には音楽はない。楽譜の記号や音符どおりに演ろうとしてはいけない」と鈴木先生にはよく言われます。難しいですが、その意味は「ジャズは自由だ」ということ。それこそがジャズの一番楽しいところですね。」その神髄はプレイヤーにしか分からないのかもしれないが、しかし練習を見



心躍る2019年の春は、音楽とともにやってくる。



知多半島 春の国際音楽祭2019
1/26(土)~3/10(日)
http://chita-haruon.com/



Swing Band TAKETYO
第23回コンサート「SBT祭」
2/24(日)ゆめたろうプラザ・輝きホール
13:30会場、14:00開演
【入場料】500円



合唱構成 そうれっしゃがやってきた
3/10(日)ゆめたろうプラザ・輝きホール
11:00・14:30開演(2回公演)
【入場料】一般前売1500円(当日1800円)、3歳~中学生前売800円(当日1000円)、親子ペア前売2000円

両公演とも問い合わせは、武豊町民会館・ゆめたろうプラザへ
(0569-74-1211)

加えられる体制をとることは必須である。また、SBTを立ち上げた行政サイドは、TTYと同様に将来はメンバーによる自主運営を目指していたので、演奏者だけでなく裏方ができる人材も求められていた。

初回の募集告知を見て集まったのは二十五人。当時を知るメンバーによると、演奏レベルはまちまちで、裏方の経験者もほとんどいなかったという。「平成十九年の秋にメンバーが決まり、半年後にはもう旗揚げ公演というかなり無謀な計画でした(笑)。町が呼んでくれた指導者の下でとにかく練習しなくちゃならないし、同時に事務作業もこなさないと公演にこぎつけられない。裏方仕事はホール職員や演奏経験豊富な団員が核になりましたが、目の回るような忙しさでしたよ」。

そうして迎えた初めての演奏会では、レパートリーもまだ五曲ほどしかなかった。日本福祉大学や名古屋芸術大学の学生バンドをゲストに迎えた。それでも会場の輝きホールには観客でぎっし

り。こんな大観衆の前で演奏したメンバーは一人もいない状態だったが、「当時の演奏をいま聴き直すときさすがに上手ではないですが、なんとも言えない緊張感を感じられて、これはこれでいいんですよ。ハラハラしましたが運営面もなんと乗り切れました」。

デビュー公演で手こたえを得たSBTは活動を活性化し、以後、コンスタントに二年二回の定期演奏会を開催していった。三年間の育成期間を終えたのちは、町民バンドとして、独り立ちした。ゆめプラというプロも羨む環境で練習を重ねてレパートリーもどんどん増やし、やがて定期コンサートはSBTの単独公演に。さらに近年は趣向を凝らした企画まで盛り込むほどに成長した。

今回の公演は、春音の中盤に差し掛かったタイミングで開催される。飛び切り楽しく、どこまでも自由な演奏で、春音をしっかりと盛り上げてくれることだろう。

ぞうれっしゃで行こう！

もうひとつの注目企画は、春音最終日の三月十日に上演される「ぞうれっしゃがやってきた」である。

これは物語仕立ての合唱曲に演劇要素をミックスした約一時間の作品で、団員募集に応募した老若男女百三十人超の「武豊ぞうれっしゃ合唱団」を中心とした舞台だ。SBTやTTYのような定期開催ではないが、武豊町では平成五年(一九九三)に初上演されて以来、これまで四回上演されており、今回は六年ぶり五回目となる。

それはこんなストーリーだ。

太平洋戦争が始まる前、東山動物園にはアドン、エルド、マカニ、キーコという四頭の象があり、子供たちの人気者だった。しかし戦争が始まり戦局が怪しくなると、「空襲で動物園が破壊されて動物たちが逃げ出すと危険だ」と考えた軍が、動物たちを殺処分するよう命じる。全国の動物園は泣く泣く受け入れたが、北王英一園長率いる東山動物園はこれを拒み、厳しい戦時体制の

中、エルドとマカニの二頭をなんとか生き延びさせることができた。

戦争が終わり、やがて混乱も落ち着いてくると、全国の子供たちから「象に会いたい」と熱望する声があふく。象に会くようになる。その声を受けて昭和二十四年(一九四九)、各地から名古屋まで子供たちを運ぶ特別仕立ての団体列車「ぞうれっしゃ」が運行されることになった。それに乗って東山動物園を訪れた全国の子供たちは、象たちに会ってたくさん元気と希望をもらったのだ。

この作品は昭和六十一年(一九八六)、公募で集まった二五七人の合唱団により名古屋で初演された。するとたちまち評判を呼び、各地で組織された合唱団によって、いろいろな場所で何度も上演されるようになった。

ゆめプラを拠点に文化活動を推進・支援する「NPOたけとよ」事務局長の高橋洋子さんは、平成五年の武豊初上演に尽力した二人である。高橋さんによると、知多半島では半田や阿久比でまず上演され、それを観て「ぜひ武豊でも」と熱望したという。「物語の素晴らしさと、子供たちも一緒に舞台を完成させてゆく素晴らしさに感銘を受けたんです」。

高橋さんが当時所属していた親子活動グループを核に、町内のコーラスグルー

あふれる音楽、あふれる笑顔。それが春音の醍醐味だ。



でいて、はっきり分かったことがひとつだけある。それは、SBTが奏でる音楽は文句なしに楽しいということだ。

他のまちにはない楽団を

SBTが結成されたのも、ゆめプラの存在が大きく関係している。

ゆめプラのオープン前、施設の活用方法を検討する町民向けのワークショップが行われたことは先述のとおり。そこで、町民からの提案がきっかけとなって、平成十五年(二〇〇三)に町民劇団、FAKE TO YOU(以下TTY)が結成された(この経緯については本誌2016年1月号「あなたを舞台へ連れてゆく」で詳しく紹介した)。数年を経てTTYの活動が軌道に乗ってくると、やがて「劇団の次は音楽を」という話が持ち上がる。そこで浮上したのが、町民参加型のビッグバンドだった。

発案者はゆめプラの職員。吹奏楽や管弦楽などよりも一般には馴染みが薄いと思われるジャズのビッグバンドを選択したのは、「どうせなら近隣の市町にはないようなグループを」という考えからという。

コンセプトは「聴く側から演奏する側へ」「演奏者も観客も楽しめる音楽を」。町民バンドの看板を掲げる以上、演奏したいと思う人が誰でも気軽に参

音楽でひとつになれる半島は、なんて素敵なのだろう。

ブや小学校も協力し、およそ二〇〇人の合唱団を結成する。また、上演資金を集めるためにバザーを開いたり、子供たちが練習に飽きないよういろいろな仕掛けを工夫したりと裏方作業にも熱を入れた。その結果、中央公民館での上演は成功を収めた。武豊町が掲げる「住民参加の文化創造」の機運は、どうやらこの時すでに芽生えていたようだ。

合唱団を牽引する名指揮者

今回の「武豊ぞうれっしゃ合唱団」は昨年八月に結成され、以後月に二回のペースで全体練習を重ねてきた。もちろんそれだけでなく、団員の誰もが自宅で自主練習を重ねている。団員は保育園の年長から八十歳代までとSBT以上に幅広く、中には親子、祖父母と孫、家族四人で参加している人たちもいる。

十二月上旬にゆめプラでの練習を見学してみると、輝きホールの広い舞台に団員たちがずらり並んで歌声を響かせていた。まだまだ完成形が見えていない段階だったが、大人数での合唱はさすがの迫力だ。

指揮台に立ちタクトを振るのは、初演から毎回指揮を担当し、この作品の全てを知り尽くしている水田哲夫さん。「見するとちょっと厳しそうなのだが、合唱指導のところどころで笑いを取

るような面白いコメントを繰り出し、和んだ空気を作っている。その人柄に、団員たちも惹きつけられているようだ。

水田さんはもと教員で、平成二十二年（二〇〇九）に野間中学校校長で退任するまで長きにわたり知多半島内の中学校に赴任していた。音楽大学の声楽科を卒業しており、各校で合唱部や吹奏楽部の顧問を務めたほか、生活指導でも手腕を発揮してきたという。今回の団員には教え子も何人かいるとか。また「合唱団みずすまし」など武豊町内の音楽グループの指導にも長年取り組んでいる。「水田さんの指導力と人柄があるから『ぞうれっしゃ』が続けられる」とは、関係者の誰もが口を揃えるところだ。

その水田さんは今回の舞台についてこう話す。「平和の尊さを伝えることが物語のテーマですが、悲惨さや辛さだけを表現するわけではありません。子供たちの明るさと大人たちの情熱が交じり合い、エネルギーを感じられる舞台になると思いますよ」。今回は、初期のTTYを指導・演出した右来左往さんを演出に迎え、これまで以上に演劇の要素を盛り込んだ内容になるとのこと。過去の公演とは少し雰囲気も変わるので、一度見たことがある人にも新鮮なはずだ。春音の締めくくりにふさわしいこの公演を、ぜひホールで体感してほしい。